

特集1

都市と家族の問題

家族とは何か

その存在の今日的意義について

山室周平〈立正大学教授〉

目次

- 1——はじめに
- 2——家族をどうみるか
- 3——なぜにそうなのか
- 4——人間形成と家族
- 5——都市化・組織の巨大化・マス化と家族

1——はじめに

戦後のドラスチックな変化の今日的な状況の中で、都市の家族がどのように変りつつあるか、それにともなってどのような問題をかかえているかがこの特集のテーマであり、種々の側面における変化の現況やそれにともなる諸問題がそれぞれの領域の専門家によって取りあげられている。そこで私はやや抽象的、一般的になるが、家族社会学を専攻しているものの立場から、家族とは何なのか、およびそれに関連して、家族が存在していることの今日的意義は何かについての私見をのべ、家族の諸問題を取りあげていく際の参考に供したい。

2——家族をどうみるか

(1) 家族は古く新しい

いうまでもないことのようにだが、家族は、きわめて古くから存在した集団である。家族以外にも古くから存在した集団がないではないが、現在、生き残っている集団は、ほとんどないといってよいし、歴史的には、一時期に繁栄した集団で、その後消滅してしまっている例も少なくない。

また今日存在している諸集団、たとえば国家、企業体、学校、クラブ等は、いずれも家族にくらべれば新しい集団でしかない。これに対して家族は、制度の点では大きく変ったとしても、集団としての家族そのものは古くから存在し、しかも今日まで生き残っている点にひとつの特色がある。

(2) 家族は広汎に存在している

家族は、いわばタテに歴史的に長きにわたって存在したと同時に、第二にはヨコにも横断的に広がりを持って存在し、地域、民族、体制等のちがいを越えて広汎に存在しているのが家族のいまひ

とつの特徴である。

家族に関する制度の差はヨコにも見い出され、また、時期的、部分的あるいは局地的には例外がないではないが、大局的、巨視的にいえばタテにもヨコにも共通して見い出されるといってよいと思う。(注)

(注) この稿の筆者の「家族」の概念については、「家族とは何か—作業仮設としての概念規定の試み」青井和夫、増田光吉編『家族変動の社会学』昭和49年培風館所収を参照していただければ幸である。

(3) 家族は生涯つきまとう

今日、多くの集団は、学校にしても職場にしても生涯の特定の時期に参加したり、離脱する。ところが家族は、親の家族と自分の家族の双方にわたることはあるが、原則的にはいわば「ゆり籠から墓場まで」人の生涯につきまとう集団であるという点でも、特色を持っている。

3——なぜにそうなのか

(1) 昆虫や狼との違い

昆虫は、先天的な本能のメカニズムが完備しているから、後天的な学習を待たずとも自から飛びたち、危険物を回避し、必要な食糧に接近して、やがて巣づくりして、次代を残していく。そのように一定の行動様式を順序正しくくりひろげることができるのは、整備された先天的なメカニズムが備わっているからといってよいだろう。

それに対して人間の場合は、先天的にそのような装置が不備なために、生まれたての子どもをたとえ食糧を十分に詰めた倉庫の中に放置したとしても餓死するほかはないだろう。人間の場合は、欲求はあっても、欲求を充足させるための一定の行動に結びついた先天的なメカニズムがないからであるようである。だがそのかわり人間は、後天的に学習をする潜在的な能力を与えられていて、

学習の仕方によっては時代や地域や民族ごとの、あるいは団体ごとの柔軟で多様な行動様式をくりひろげることができる。しかし、人間の場合は、さしあたっては欲求の充足をたすけ、やがて自分で充足することができるようになるための、後天的な学習ができるような場が、出生と同時に、あるいはそれに先立って用意されていることが不可欠である。

しかしながら、そのような場が、狼の環境であったとしたらどうなるであろうか。『狼にそだてられた子』（ゲゼル著・生月訳 法政大学出版社）カマラにみられたような結果にならざるをえないであろう。

即ち、彼女は生後まもなく狼のすみかに連れ去られ、狼の子どもらとともに親狼によって授乳・保育され、肉体的には人間でありながら狼の行動様式を後天的に学習し、狼として四つ足(?)ではい廻り、遠吠えによって狼の仲間とコミュニケーションし合っていたのであった。

やがて約7歳と推定される時期に人間の環境に連れ戻された彼女は、少しづつ学習することによって人間の言語や歩行をある程度まで身につけるにいたった。しかし、すでに内面化されていた狼の行動様式を克服するためには、異常な努力が、潜在的な能力があったといわれているにもかかわらず、必要であり、発見されてから6年後によく立上って両足で歩くことができ、30語を話すことができたということである。

(2) 人間の嬰兒を受けとめる場

人間の場合も、セックスとか授乳というような先天的な欲求が根底にあるということが、家族が生まれたばかりの子どもを受けとめるための、共通の社会環境とされたひとつの理由であったろう。しかし人間の場合は、それらの欲求を抑圧したり、家族をやめて他の様式を選択することもで

きないではない。

しかし、前述のように、事実上、長い間、広い地域にわたって、民族をこえ体制をこえあるいは文化をこえて、家族を持ちこし、生まれた子の受け留め場所としてきたということは、家族が選択による人類の生活の知恵であり、いわば人類共通の文化遺産であったということができらう。

それならば家族が人類の生活の知恵、文化遺産として選択されたのはなぜであろうか。

4——人間形成と家族

(1) 二つの機能

現代アメリカの高名な人類学者マードックは、主として未開社会の広汎なデータにもとづき、家族は小集団であるが、世代差、性差、きょうだい間の年齢差を含む多様な二人関係の組合せとして成立している点で、そこでの学習が、やがて家族の外に巣立った時に、非常に役にたつという点、性、生殖、経済、教育という、非常に重要で不可欠な社会的な機能の充足に大きく寄与している点などをあげている。(注)

また、現代アメリカの著名な社会学者パーソンズは、アメリカの現代都市のホワイトカラーの分析から出発し、核家族の不可欠で基本的な社会的機能として①「子どもの基本的な社会化」と②「成人男女のパーソナリティの調整」の二つをあげ、それらを充足する核家族の社会的な重要性について論じている。

(注) 核家族の機能については、四つとか二つとかにしぼる考え方が多いが、この稿の筆者自身は、むしろ家族の機能は、多面的、包括的であるところに特色があると考えている。山室周平「家族の機能」、姫岡・上子編『家族——その理論と実態——』所収を参照。ただし、家族の今日的状況を問題にする場合、パーソンズの理論は、よい手がかりとなるであろう。

(2) 人間となるということ

このように主として、未開社会のぼう大な資料から出発したマードックも、現代アメリカの主としてホワイトカラーから出発して精緻な分析を加えたパーソンズも、ともに「教育」あるいは「基本的社会化」といった点に、家族の機能の重要な特色を見い出しているといえるであろう。

そこでまず、我々の問題について考えてゆくうえで、家族における「教育」あるいは「基本的な社会化」という点から家族の存在意義について考えてみよう。

仮に、私が生れたままでアメリカ人の家庭へほうり込まれて成長したとするならば、身体は日本人でありながら、英語で話したり考えたりするし、またアメリカ人のような身振り、審美感、道徳感を持ったアメリカ人になるだろう。そうして3歳から6～7歳の頃の学習は、身に付き内面化されやすいので、抜きがたいものになるから、十分な意味での日本人になろうとしてもたやすくないだろうし、しかも長期にわたる努力なしには、困難となるだろう。

したがって、家族の中で人間が形成されるといっても、さしあたりアメリカ人、ドイツ人、フィリッピン人、日本人というような限定された意味での人間としての第一歩を踏み出すことになる。

しかしながら、忘れられてならないのは、社会化されると同時に、他の一面においては家族の中で、画一化、規格化された人間としてではなく、一人一人の人間として形成されるということ、いかにいえば「個人化」されるという点である。

即ち、家族においては規格化され置き換えのきく、匿名的な人間を大量につくり出すのではなく、一人一人の、いわばかけがえのない人間として形成できるという点に注目すべきであろう。一人一人の人間の多少とも違った柔軟な思考や行動

資料主とを加「基要なくう本的いてへほ日本する道して面化十なは、いイ味。会中、いきなし一動

が、一定の行動様式に何千年も停滞している昆虫とは違って、常に新しい歩みを切り拓き歴史を書きかえることができたのである。

しかし、人類の進歩は、より直接的には、技術人、技能人といった専門家に負うところが多かったであろうが、家族が担ってきたのは、そのような専門家の養成ということよりも、未分化のままの多様な潜在的可能性を持ったままの、人間の「基本的（プライマリィ）な社会化」ということであった。

5———都市化・組織の巨大化・マス化と家族

(1) 都市における今日の状況

技術の革新や「経済の高度成長」のなかで、組織の巨大化や人口の都市集中が著しく推進された。それにともなって、出身地での近隣や親族とのより全人的でウェットな人間関係から離脱して、都市に流入した人々は、より一面的、一時的な、またドライで匿名的な人間関係の中で孤立化し孤独化する傾向がある。

他方、巨大化された経営体内部の組織は分割され、細分化され、それらを統合、統括するための上からの管理も強化される傾向がある。したがって、そこで働く人々は細分化された仕事に適應するように養成・訓練された要員として、終日あるいは何十年にもわたって極めて部分的で単調な作業を繰返すところから、人間の「部品化」「奇形化」「非人間化」という現象がみられる。

さらにここで注目したいいまひとつの趨勢は、規格化、画一化という動向である。即ち大都市に流入した住民は、しばしば規格化された住宅に自分たちの生活を適合させねばならず、しかも規格化され、大量生産された商品を「大衆消費」し、マスコミの「一方向の流れ」におし流され、娯楽から教育までがマス化されるというような一連の

マス化現象のなかで「他人指向」型の規格化され、画一化された行動をとりがちになる。このことは昆虫の先天的で非選択的な、歴史を欠く画一的な行動様式とは、いうまでもなく異質であるが、選択幅を失い「他人指向」的になり、規格化、画一化された行動という点に関するかぎりには「非人間化」に類する一面とってはいえないではないだろう。

(2) 「プライマリィ・グループ」の再発見

アメリカの巨大な企業に組みこまれた、一工場における人間関係の克明な調査研究にもとづき、レースリスバーガーらは、「合理的」な企業の側の論理にもとづく公的な職場の人的編成とは別に、工員の側の「情緒」の論理にもとづき、気の合った仲間たちと非公的なグループを作り、時には作業を交換しあったりしながら人間性の温存、回復をはかっていた事実を明らかにしたのであった。この調査結果は、「非人間化」の懸念される巨大組織のまっただ中に「噴出」した、ある程度まで人間の温存や回復を期待できる「第一次（プライマリィ）集団の再発見」として喧伝されたのであった。

(3) 人間の回復と形成

このようなインフォーマルグループ（非公的集団）が、人間の「部品化」「奇形化」「非人間化」をくいとめ、人間の温存、回復に多少とも役立ただろうことが期待されるとしても、パーソンズが家族の不可欠で、基本的な機能の一つとしてあげている家族における「成人男女のパーソナリティの調整」により多くを期待しないわけにはいかないだろう。

しかし、そのことより以上に重要なのは、すでに形成されていた人間の温存や回復より、より基本的な人間そのものの形成である。組織の巨大化

やマス化のなかで、安易な、あるいは余儀なくされた育児の共同化や育児法のマスコミによる画一化といった傾向がないではないが、家族の対一の——かけがえのない一人一人としての——より全人的な人間関係のなかでの、いわば「手作り」の「基本的な社会化」と個人化に期待しないならば、非人間的、規格化、画一化の趨勢やそのような体制自体を打開するための創意や主体性をもった人間の形成を他のいずれに期待することができるであろうか。

そのような意味で、家族の存在は、きわめて重要であるのみならず、今日の状況のもとでは、過去においてより以上に家族にたいする期待がより大きくのしかかっているといてもよいだろう。そして、今日、家族、ことに都市の家族に生じつつある諸問題は、そのような意義と課題をもった家族が当面している問題である点に留意が願わしい。